

泥棒とイーダ

第06回 彼の見知らぬ顔

牧田真有子

天へとまっすぐ伸びる竹藪たけやぶの底に美術館は沈んでいる。平らな屋根の二階建てだ。菱形ひしがたの壁タイルに不規則にはめ込まれたガラスブロックは透明なのに重たげで、時が静止した館内を隠しているような感じがした。だが一步内部に入ると、温かくてすみずみまで手入れが行き届いている。カーペットは佐原さばらさんと私の足音を次から次へと吸った。来館者は我々だけだ。第二展示室を出て階段へ至る小さなスペースには何も載っていない黒い石の台座があり、一枚の紙が貼られている。

『こちらの作品は心ない者によって盗難に遭いました。皆様からの情報をお待ちしております。お心当たりのある方はお知らせくださいますようお願いいたします』

『『A』が抜けてる』

佐原さんは十四年の間に色褪いろあせた貼紙はてがみへ囁ささやくような声で校正した。キャプションには『『無題V』黒井澄華』とある。すらりとした長い光が窓から差し込み、空っぽのガラスケースと、佐原さんの頑かたくなような横顔を照らす。彼が肩からななめに掛けているショルダーバッグの中に、『無題V』が入っている。

咳払いしたくなったが我慢して秒を数えた。彼は両手をウインドブレーカーのポケットに突っ込んだまま九秒たたく佇たたずんでからぶらぶらと歩き出した。心ない者という文句は佐原さんにうってつけである。この人には内も外もない、生理的な不快不快しか基準がない、と矢継ぎ早に弟を糾弾する俊子とじこさんの声を思い出した。さりげなく見渡すと、監視員のおじさんはすぐ近くで細身の体を曲げて展示ケースを拭いていた。ガラスというより曇りを慈しむような手つきだ。

十五歳の佐原さんが泥棒に入ったあとで急速に強化されたというセキリティの一つが監視員の常駐であった。かつて佐原さんが「いやに気配のないおやじ」と称したとおりの。巧みに空気と混ざってしまう。とてもさりげなく随行してくる。

二階の展示室に上がってから数分間だけ、私たちは監視人の視界から抜け出せた。私は展示ガラスに映る佐原さんのうつすらした像に話しかけた。

「もうすぐ上がってきちゃうよね。私がここで何か質問しておじさんを引き止めるから、佐原さんは盗品を返したら？」

「お前が露骨に連携を疑われるだろうが。いいか、今このときも防犯カメラの記録に残ってんだからな」

「十四年前は二歳だから、共犯者とは思われないよ」

言いながら私はカメラがある天井の隅へ視線を持ち上げた。佐原さんが黙って威嚇するので、また美術品へ目を戻す。複雑にめぐらされた模様が途中から摩滅していく球体の焼き物。キャプシオンによれば「前衛的な作風で名を馳せた」、地元出身の陶芸家である黒井澄華の作品が、この階の最初の部屋を占めている。何十年も昔の「前衛的」がなぜか未だになぞめいていた。佐原さんは後ろ手を組んで仔細しさいありげに見ているが、同じ表情のまま空調機も鑑賞していてあてにならない。

美術館には私が誘った。一昨日のことだ。たしか付き合いたしたと思うのだが、佐原さんからはいかなる提案も皆無であった。映画の試写会の券を手に入れた私は、彼に電話をかけて「初デートを記念するために恋愛映画を観に行こう」と言った。佐原さんは小舟くらいなら動かせそうなため息をついて、電話を切った。私は習慣となった夕方のジョギングで自分をじゅうぶん温めてから、内容を調整してメールを送った。

『盗品を返す偵察のために例の美術館へ行こう』

『あの美術館に関する有力な情報でも入手したのですか。なぜあなたも行くのですか』

と返信があった。

『何も入手してない。私も行く』

私の都合のいい日時とともに送ると、もう返事はなかった。しかし待ち合わせの場所に、佐原さんは先に着いていた。痩せ型だが重みのある体を日向にくっきり立て、浮かぬ顔でこちらを見ていた。私は足がもつれそうになった。彼の姿は私の中で、思い切り響く。本当に好きなのかどうかともわからないのに。

一応持ってきたという『無題V』で少しふくらんだままのシヨルダーバッグを、片方の肩にかけかえて佐原さんが美術館を出る。向かいに広がる畑で何かを焼いているらしく、煙たい道を歩いた。

さすがに今となつては私もわかつていた。自分のせいで不本意に生きている子どもの主張はとりあえず通す、と決めている佐原さんの、悲劇的な覚悟のもとで成り立っている関係にすぎないこと。そういう思いの形式から自由になつてほしくて、彼と対等な立場まで移動したくて「恋人にしてほしい」と言ったのに、やはりその形式に当てはめられたこと。沼男が私の認識の中を駆け抜けたのに比べ、私は佐原さんの認識の中で動けないこと。それを一人で打開するほどの白熱を、自分がまだ知らないこと。

ある意味では以前よりも、佐原さんとの関係はシビアなものになつてしまった。二人の間にあるものを恋と名づけることはずさんな飛躍であり、今までの関係性の残滓まで徹底的に失うことと同義なのかもしれない。信号で立ちどまつたとき、私は声を聞こうとして名前を呼んだ。彼はしっかりと目を合わせたが何も言わなかった。上空を渡る鳥が、鳥の形をした小さな叫びに、遠ざかる畑の火が、火の形をした小さな叫びに見えるくらい、不安になる。でも止まる気はなかった、行けるところまで行くつもりだ。

短い冬休みの間、しょつちゅう粉雪が舞った。乾燥した地面に積もることは一度もなかった。学校が始まると放課後に佐原さんのアパートへ寄つて翌日の予習などしてから帰宅するようになった。たまに会うとか

えって、私が恋人であることの違和感を佐原さんが嘔みしめるようだからだ。ただし、彼が玄関先のアルミバケツを振り回して追い返したりせず、いつも鍵を開けておいてくれるのは、私を認めたためではない。彼は慣れていたので。集会の日に限らずイーダ会メンバーは代表のもとを思い思いのタイミングで訪れていた。ドアを開けると、来月の「手作り市」で売る予定のオーガニックパンを巡って会議が行われていたり、私が数学の問題を解きながらうとうとしていたりするところへ室木がやってきて、チラシの束を段ボール箱から抜いていたりした。

命知らずのイーダ会の人たちは、パンの試食をするときに佐原さんを呼び寄せることがあった。おいしいときは彼は何も言わずに全部食べた。嫌いな味ときは暗殺者のような表情で全部食べた。彼にとって、食べ物を残すというようなことはありえないのだ。

私が何者として通っているのか、室木だけが知っていた。たまたま三人で部屋にいたとき、室木が佐原さんに間柄を確認したからだ。佐原さんは鉛筆を走らせながら「彼女」と答えた。風の強い午後いっぱい、ロープに干しておいたような声だった。だが室木は、「そのことは秘密にしておいてもらえませんか」と居ずまいを正して切り出した。特定の個人と代表との排他的な交際は、せつかく一つにまとまろうとしているメンバーたちに悪影響を及ぼしかねない、というのが彼の見解である。口止めなどされなくても佐原さんが言いふらすわけではないし、私もそんなわけのわからないリスクを背負いたくなかった。やがて、イーダ会のメンバーに日本史の試験のポイントを教えてもらったり、家でドーナツをどっさり揚げて彼らにおすそ分けしたりするのが、日常のささやかな場面として定着していった。誰かに「亜季ももうイーダの一員みたいなものだね」と言われるとにやにやして受け流した。

佐原さんはいよいよ奥の大きな文机に向って仕事だ。仕事のないときは体を鍛えていた。道理から外れている人を見て不快になったら、相手の種類など考慮せずに注意したり羽交い絞めにしたりする彼なので、敵が多いのだろう。高校生のグループから返り討ちに遭ったときは肋骨

と手首の骨を折った、右目を失明してもおかしくなかったと、姉の俊子さんから聞いたことがある。畳に親指だけつけてすばやく腕立て伏せしている人の、荒いが規則的な鼻息を聞きながら私は連立方程式を解くのだ。彼と口をきくことはあまりない。二人きりのときは、「おじゃまします」から「じゃあね」まで無言のことも多い。

台所の窓からは、妙に色の浅い、もつれあつたような雑木林と、商店街から折れた路地にあるあやふやな酒屋のアーケードと、整然と古びていく床屋の衛生的にがらんとした店内が見えた。私は彼の部屋に居てふと淋しくなると台所へ行き、曇りガラスをからからと引いてその景色をながめた。景色の方が見事に淋しそうだから私の方はそれを手放せそうな気がした。でも実際には、手放したと思っているものによって、景色と私が境い目なくつながっていくのかもしれない。

「会員制交流サイトって使ったことある？」

箸を手にしたまま、親子丼から顔を上げてセツが私に言った。相変わらず化粧は浅黒い肌には光沢があり、眉毛は道端の夏草みたいだった。私は首を振り、横合いから俊子さんが「いっとき」と言った。あんかけうどんという一途に熱い食べ物をさっさと平らげた俊子さんは楊枝を使っていた。三人は留守中の佐原さん宅の前で会った。在宅で仕事をし、普段はメールと宅配便でのやりとりに終始する佐原さんだが、出版社に直接出向くこともあるらしい。俊子さんは合鍵で入り、持ち込みの鰯や豚肉を冷蔵庫にしまつて、今日は旦那に子どもを任せているから近くで夕食でも、と二人を誘ってくれた。

「最初の子のときって、やっぱり不安だったし。ちよつと皆と違つたり、本に書いてある通りじゃなかったりすると、いちいちね」

俊子さんは言った。

「でもお姉さんって、ご両親とお住まいですよ」

佐原さんとの恋人時代からの知り合いらしいセツは、少し考えてから尋ねた。俊子さんはすぐに言った。

「あの頃って母親の更年期障害がひどくて、相談なんかできなかった」

セツは何度かやわらかく頷いて、俊子さんが登録していた交流サイトについて何点か質問した。いくつもある中からどうしてそこを選んだのか。実際にどの程度参考になったか。改善すべき点は目についたか等々。私は五目うどんを啜りながら耳を傾けていた。

「もうそのサイトは覗かないんですか」セツは言った。

「二人目のときは加減がわかってきてたし。上の子よりだいぶ目の粗い育児だったと思うけど」

「お姉さんが今度はアドバイスを与える側として利用するのは？」

「そんな時間ないって。それに、ありがたいことだけど結局ごく平凡な育児しか経験してないしね。私じゃなきや教えたり励ましたりできないってことがあるわけじゃない」

椅子の背にどっかりもたれて、俊子さんはにこりともせずしかし誠実に問いに答えつづけた。

本屋に寄っていくというセツと別れ、自転車を押す赤いダウンジャケットの俊子さんと目抜き通りを歩いた。

「最近よく会うね。あの子の家で何してるの」彼女は言った。

「英語の予習とか」

「どうしてあの子の家で？」

「図書館みたいだし」

俊子さんはこちらを覗きこんだ。つべこべ言わさぬ引き締まったまなざしを、相手の目の深くまで送りこんでくる名手なのだ。それを知っている私は、眼科の患者みたいにただ目をひらいていた。

「あの連中と、関わらない方がいいよ。どういう集まりか知ってるんだよね？」

私は頷いた。俊子さんがイーダ会メンバーのことを指しているのはすぐにわかった。

礼儀正しい彼らは、代表のもとに集まっているとき俊子さんと居合わせるのにこやかに挨拶する。しかし場の雰囲気はサツと張りつめるのは

明らかだった。俊子さんは彼らが見えていないように振舞った。

佐原さんと私の関係については一かけらの疑いも差し挟まれなかった
ので、内心拍子抜けした。

「セツとは、でも、仲良しなんですわね」

「セツちゃんは別。なかなかいい女だよ。あの子の最後の恋人」

「どうして最後っていうんですか」

「だって潔癖野郎じゃん。セツちゃんと別れる少し前にはもう、たとえ
財布は忘れても除菌ティッシュは持っている、憎たらしいやつになっ
たからね。道で死にかけてる人がいたら罵りながら人工呼吸するような
子だけど、そんなことでもない限り他人に触らない」

私は俊子さんの横顔を見た。大雑把だが決して欠かされることのない
化粧、しかしやはり弟と似ている。佐原さんそっくりな人が、彼と同じ
ように無愛想で、そして正反対にリラックスしているところから、私は
なかなか目が離せなかった。

佐原さんがセツを好きになった理由は闇につつまれている。セツによ
ると、「あの人の恋愛には経緯なんかはない。衝動しかない。そして劇的
に飽きてかなぐり捨てる」。とにかく一旦惚れたら陰気に熱烈に迫り来
る人だという。私はそのときセツに、佐原さんとの初めから終わりまで
をまとめて訊いていた。面と向ってだと「透視」されてしまうので電話
をかけたのだ。しかしセツはいつになく上の空の口調だった。忙しいな
ら掛け直すと言ったが「亜季って割といい声だね」と変なお世辞が返っ
てきただけだった。

当時、セツには恋人がいた。アルバイトをしながら夜間の語学学校に
通っていた彼女は、ワンルームマンションに住み、線路を挟んだ向こう
側のパン屋に毎日通った。夏の間は、妙な客に目をつけられた。その人
が先にいることはまずない。あたりのゴミ拾いをして待っている。セツ
が店内に入るとすると滑りこみ、パンをほとんど見ずに彼女の方を凝
視し、会計ではセツの後ろに並んで後頭部を凝視し、懊悩の表情でレジ

横の募金箱に千円札をねじ込む男、それが佐原さんだった。

ある蒸し暑い夜、鳴り始めた警報音にはじかれて踏切を渡ろうとしたセツは、下りかけた遮断機をくぐってくるひとの像が咄嗟とつさに思い浮かんで振り返った。案の定男は駆け出しそうになっていた。立ちつくしたセツは追いつかれた。男は彼女の半袖から伸びる二の腕を掴み、「写真撮らせて」と片手でカメラを取り出した。全身像を撮るのかと思ったが、男はまさに二の腕だけを、のめりこむように接写して走り去った。

数日後、パン屋に再び現れた彼は腕まくりしながらセツに近寄り、彼女と同じ位置に同じ模様で入れた刺青いれずみを見せ、「しかしこれって何」と迫る。「鱗うろこ。彼氏が、釣りが趣味で、お揃いそろで入れたんだけど」とセツ。「なるほど。その人のこと殺してもいい？」と男。

もうその必要はない、彼とは別れる、とセツは言ったらしい。

「よくそんな人ときあう気になったね」

途中で充電が切れそうになり、片手でアダプターを探しながら動き回っていた私は、ようやくコンセントとつなげた携帯電話を持ち直した。「そういうえば一緒に暮らした頃、絶対先に死ぬなって念を押されたことがあった。私の元恋人と彼とだけがお揃いそろの刺青を入れてる、気持ち悪い状況になるからって。私は、でもこの凶像の意味は確実に変わった、って言った。あなたが変えたんだ、って。嫌な人だと何度も思ったけど、彼とあななってなかったら今の私はいない」

「その頃のセツってどんな人だったの」

電話越しなのに、セツが半分上の空のまま顔をしかめるのがわかった。

「青いカラコン、灰色の毛、ピアスだらけ。休みは全部海外旅行」

「ぜんぶ同時に想像することができない、今のセツと重ねて」

「金髪ダメガネ作業着っていう時期もあったし。ねえ生まれた国とか体質とか容姿って、たまたまのものにすぎないのに絶対取り替えられないし、自分を特定してくるじゃない？ でも私の中身って、そういう客観的な事実の重さに比して、あるようなないような程度だった。ずっと釣り合いが取れなかったんだよね」

彼女の漠然とした声音に、掃除でもしながら通話してののだろうかと携帯を耳へ押し当てた。けれど掃除機の音もテレビから流れる音も何も聞こえない。落ち着かない私はさつきから、手元に引き寄せた反故紙ほんこの裏に、緑のボールペンで大小取り混ぜた三角形を落書きしていた。

「今もお友達の服を着てるのはそのせい？」私は言った。

「これは単なる節約。あの人につきあったのを境に、私は以前の私みたいなやり方を終わらせたから」

「佐原さんのどんなところが良かったの？」

「亜季って、図書館よく利用するほう？」

「何？ 図書館？」

「私が亜季ぐらいの頃、市内の図書館のネットサービスが飛躍的に向上した時期があったの。それまでは、読みたい本があるときはまず最寄の図書館に行って、そのOPACで探して、なかったらそれを所蔵している図書館を教してもらって、自分で行く方が早いから自転車でめぐってね。図書館って市内にいくつもあるけど、館ごとに独立してる印象で、建物の感じやら周りの環境やらと組みあわさった、ごく地上的な存在だった。でもだしぬけに、家のパソコンから市内の全図書館を対象に横断検索ができるようになって、借りたい本がどの館にあらうと、画面のボタン一つで最寄の館に取り寄せ予約ができるようになって。各館の出してるパンフレットみたいなのも家にいるまま全部閲覧できるし。なんか、突然ひらけた場所に出たみたいだった。目には見えない一つの大きな図書館ができたみたいで。君にはそれがスタンダードだろうから大げさに聞こえるだろうけど、私は目の前で、当然だと思ってたものの構造が変わって価値がズズズと動くのを見た気がしたんだよね。でもそのときは、それつきりだった。自分自身のことと結びつけられなかった」

「うん」私は手をとめた。図書館のサービスが向上していく間に緑色の三角形が十七個生まれた。

「あの人が夜のパン屋で鱗の刺青を見せてきたとき、これはこの人にこそふさわしいと思った。『個』と『個を超えたものの一部』であること

との、境界の手ざわりみたいなものが彼にはあった。たった一人で『自分以外』になろうとしてた自分のことも、よくわかった」

それからセツはにわかには声の形をはっきりさせた。

「あのさ、イーダ会のメンバーも目録化して、メンバー内なら誰でもネット上で検索したり閲覧できるようにしたらどうかと思うんだよね」
「もくろく」

「集会に来たり、サイトの掲示板に書き込みしたりしてる人たちの、一人一人がもつ情報を一箇所に集めて、皆で共有できるようにするの」

「情報って。お誕生日とか？」

「年がら年中おめでとうって言いあうわけね？ まあいいけど、私が思ってるのは、特技、経験、知識、資格っていうところかな。あと趣味もそれらの能力の持ち主が誰なのかが、他の人にも簡単にわかるような仕組みを作る」

「それを見たら、『この人は理工学部を出てるから数学を教えてくださいさうだ』とか、『この人は趣味が洋菓子作りだから、失敗しないシュークリーム^{まかのぼ}の作り方を聞いてみよう』っていうふうに、命中しちゃうってこと？」

「そういうこと。人物の自己紹介リストっていうだけじゃなくて、逆からも遡れるようにする。洋菓子作りを習いたいっていうのがまず君の側にあつて、それから、その能力の所在を一発で探せるように」

「特技も資格もない場合はどうしたらいいの」
「それは難しいとこだけだ」

電話の向こうから初めて物音らしい物音がした。テーブルをコツコツとたたたく、やや重みのあるペン。佐原さんや自分自身についての話をしていたときは、彼女もそれで落書きしていたのだろうか。

「でも亜季、ひと一人がもつ情報量って膨大だと思わない？ だってとにかくもその人は、その人しか知らないやり方で生きてきたんだから。別に世間一般で言うところのぱりっとした資格や知識なんかじゃなくていい。失敗談が他人の役に立つこともあるし」

「えっと、村は？」

「ああ、室木さんたちのね。でも私、彼が求めている村を、彼より早く作れそうな気がする。ネット上なら。だって土地の購入とか法的な手続きとか電気ガス水道どうするとか牛やら鶏を飼うのかとか、さあ。全部が遠すぎる」

「私はインターネットをあんまり使わないから、それはそれで遠いかな」

「私も普段は決まった範囲でしか使わないし、実際にどれほどのことが可能なかまだわからない。でもたぶん、個性の貸し借りを当たり前にできる場があれば、ここでは私は私以外との距離を飛び越えてる。『個』の質をもっと自由なものにできる」

それがこの人にとってのイーダなのか、と思った。私はいつのまにか三角形の落書きをするのをやめ、緑のボールペンを机の上に置いていた。その晩は眠りに落ちるまで何度も、頭の底でセツの声が、一気に咲く花のように広がっては消えた。

学校を挙げてのマラソン大会に備え、体育の授業は運動場や川原を走ってばかりだ。鼻をかんだりリップクリームを塗ったりネイルアートを見せてくれたり、マラソン中とは思えないほど多忙なシロと、私はよく並んで走った。赤ジャージの我々の集団が、男子生徒の黒ジャージ集団とすれちがうときは、つい沼男のふさふさ頭を探した。沼男は、あくまでシロにだけ、「集中して走らんか」と体育教師風に声を掛けたりした。彼に林檎を持っていった夜から、挨拶以上のやりとりをしたことはない。

休み時間の廊下で、砂粒が入った片方のスニーカーを脱いで床に打ちつけていると、背の高い人が私を追い越していった。史乃だ。そのとき、校章入りの金ボタンが私の視野まで転がってきて止まった。一体なぜ人は私の前で物を落として行きたがるのだろうか？ 彼女とはあれ以来挨拶すら交わしていない。

「いかん！ 長村ながむらさんのすてきなボタンが！」

背後から急に沼男の声があった。制服の金ボタンは、拾い上げた彼の掌から、振り返った史乃しのの掌てのひらまで低く弧を描いた。可笑おかししそうに笑んで礼を言い、彼女は午後の光が溜ためまった階段を下りていく。私はやっとスニーカーを履いた。

「おそれいります。沼男には一生頭が上あがらない気がする」
向き直って言った。彼は口をとがらせた。

「うそつけ。ていうか『頭が高い』の人とはどうなったの」
「それなりに」

それなりに無残なのだが、ありのまま伝えるわけにもいかなかった。沼男は「あんな人とうまくいくなどということがありえるのか。ある意味勇氣がもらえるな」と感心してみせた。

県境にあるひっそりとした街の病院を佐原さんと室木と三人で訪れることになった。イーダ会メンバーの見舞いである。

前日の夕方、私が借りている卓袱台ちやぶたいの横で二人はもめていた。自分が運転すると言う室木を佐原さんは睨にらみつけた。

「俺の乗り物酔いをなめやがって」

「吐いていただいて結構です。実家の車ですし。ビニール袋をたくさん持っていてきましょう」

「そいつにも途中まで来させる。点滴のあれって下に小さい車輪がついて動かせるだろ」

「そういう入院じゃないです。心の疲れからくるものなんです」

「俺が行ったからってどうなるものでもないし」

「もちろん劇的に良くなるなんて思ってもせんけど、彼女の中の流れを一瞬変えることはできると思います。代表はご自分の価値をわかってらっしゃらないですけどね」

佐原さんは手のひらで顔をいらいらとこすってから私の方を見て、「一緒に来て」と言った。私はなんとなくめでたい気持ちになった。

よく晴れた土曜の朝、室木の車はアパート前に立つ佐原さんと私を拾って出発した。本人の主張どおり、まだ近所を走っているうちに佐原さんの顔から血の気が引いて吐きはじめた。室木はそんな彼を元気づけようと歌いながら運転した。音階の正確な非常にしつかりした歌い方だった。佐原さんが自力でビニール袋を構えていられないほど弱ってきただので私が袋の口をあけて待機した。触れた佐原さんの指は汗でじつとりと冷たかった。背中をさすってやると、「目の前に赤い斑点が見える」と小さな声で言った。色々と不快なことの多そうな人で憐れた。

いつのまにか目当ての街に入っていた。今は溶けかけているがこの辺りはかなり雪が降ったようだ。道路の両側を黒ずんだ雪の一行が縁取っている。山裾に建つ煉瓦造りの病院に到着し、急患と間違われそうな佐原さんを、室木と両側から挟んで中へ入った。入院している内林さんは十二月の集会で私の自己紹介がその場の空気を不適切なものへ追いこんでいたとき、「もなかを頂きましょうか」と助け舟を出してくれた女の人である。以後も佐原さんの家でしばしば顔を合わせていた。二十八歳で、会が発足した当時からメンバーだ。室木がかつて所属していたポランティアサークルから移ってきた面々の一人らしい。善良な人が多いイーダ会の中でも特に、デリケートな配慮を惜しまない人だった。余裕があるからというより、それだけの優しさと気遣いを彼女自身も求めているからこそその切迫したものに思えることもあったが、皆から慕われているのは確かだった。

カーテンで区切られた大部屋の、いちばん手前のベッドで横になっていた内林さんは、見舞い客から訊かれるより先に「大丈夫ですか」と訊かねばならなかった。それどころか、返事もできないでいる佐原さんに「良かったら」とベッドを譲ってくれた。私はとめたが、縮模様のパジャマの彼女は手編みらしいストールを引つ掛け、素足にスリッパを履いた。

「ああ、さっと立てて、うれしい。このところひどかったの。落とした腕時計を拾うのすら億劫で億劫で。代表のおかげです。代表まで来てく

ださるとは聞いてなかったから、効果倍増だったみたい」

佐原さんは黒いコートと靴を脱いでもう泥のように横たわっていた。壁沿いの二つ並んだ丸椅子に内林さんは室木と並んで座り、私は医師や看護師がやってこないか廊下で見張りをさせられた。二人がぼそぼそと交わす言葉が聞こえていた。

「バイトは休めたの？」

「仕方ないからまたやめちゃった」

「うん。いい肩掛けだね」

「祖母と母が、家事の合間に少しづつ編んでくれて。いつでもこっちに戻ってきたらいいんだよって、言ってくれるんだけど。どこにいても一緒なの。私も、車に酔うみたいに、この世に酔ってしまう」

「乗り物じゃないから降りられないしね」

「時々どうしても死んでしまいたくなる。そう思うことを自分に禁じていると、体が固まってくるの。動かそうとしても動かないの。早く私たちの村で暮らせたらいいのに」

「そうそう。イーダ会を酔い止め薬だと思ってよ」

でも肝心の代表があれほど打ちのめされている。

佐原さんが持ち直した頃合を見計らって、室木が「じゃあそろそろ」と腰を上げた。私たちの乗ったエレベーターの箱が視界から流れ去るまで、内林さんは手を振ってくれていた。

コートに袖を通しながら駐車場へ直行する室木に、「どこかで休んでから帰りますよね」と一応確認した。彼は「そんなことしたらバイトに遅刻するよ。代表も、もう乗れますよね？」といたわるような声音で無茶を言う。二度とあれには乗らない、徒歩で帰る、と佐原さんは言い張った。結局、「わかりました。僕は代表の意見を何より尊重します」という殊勝な理由で室木は一人帰っていった。私は呆然としつつも、佐原さんがトイレに行っている間に、受付で地図をもらったりタクシー会社の番号や一時間に一本しかないバスの時刻を控えたりした。そして踏破をめざす悲壮な面持ちの佐原さんと病院を出た。

青空が濡れた街ぜんたいにつやつやと映っているようだった。地図を持つ私が先頭である。

「内林さん喜んでたね。自殺を思いとどまらせるなんてすごい」

「真に受けるな、あいつらのうわごとを」

「佐原さんは、私だけじゃなくメンバーのわがまままで許容してあげるんだね」

「許容だよ。あいつらにそんな義理立てする必要がどこにあるんだよ」

「え？ だって、ぐちゃぐちゃになりながらも来てあげたじゃない。いつもあの人たちの好きなようにさせてあげるじゃない」

返事がないので振り向くと、歩くペースを落とした彼は、伸びて睫まっげにかかりそうな黒い前髪の下からくいているようにこちらを見ていた。くいているようだが全く感情の読みとれない目つきだった。私は驚いて中心のずれた声で「佐原さん？」と言った。彼はいつもの表情に戻り、正面を向いて歩き続けるよう目で促した。

「あのやきものな、俺が石崎のとこからかつぱらった。室木は全部知ってて、なおかつ会のシンボルにしようとしてる。とつと返さないとあいつ悪気もなく写真撮ってピラに使いそうだしな」

セツの元恋人の釣り趣味と、前衛的な陶芸作品。青い鱗に覆われた球体と、無限の増殖がめざされているはずの刺青。寄せ集めたものたちが落とす、ほぐせない一つの影。一つの影の中をうつろう濃淡。私は今度は前を向いたまま尋ねた。

「そういえばなんでイーダっていう名前なの」

「意味はない。名前を決めるよう室木に迫られて、腹が立ってそのときあいつの肩越しに見えてた『飯田酒店』からとつてやった」

佐原さんのアパートの窓から見える酒屋のアーケードを思い出した。白く染め抜かれたその名前は、生地のオレンジ色があまりに褪せているせいで、半ば流失したように見える。

物音の少ない街だ。商店も信用金庫も街路樹も旅館もさりげなく何かを待っているみたいだった。そしてそれは、私自身の表情なのかもしれ

ない。私は知りたかった。さっきの彼の反応は何だったのだろうか？ 静か
かで、なまなましかった。わがままのスケールが広大すぎて個人の枠を
はみだしがちな佐原さんが、そういう気配を一切帯びていない一人の青
年と、ふいに入れ替わったみたいだった。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」「群像」09年5月号、「予言残像」「群像」10年6月号、「今どこ?」「WB」20号、「合図」（早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの「距離」）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2013

published by wasedabungaku 2013